生徒とのふれあい⑥

谷内純一

教員2年目、高知西高校で期限付講師だった私は演劇部顧問のH先生から依頼され、同部の夏休み合宿に引率者として参加しました。合宿場所はいの町の柳の瀬キャンプ場でした。そこは仁淀川でも広い川幅のところで川原もまた広いところです。

晴天のある日、私は川原に腰を下ろして爽やかな風に吹かれながら、広い川面を眺めていました。

上流から2年生のK子さんが平泳ぎで下ってくるのが見えました。その少し後ろの方を逞しい体格の男性が抜き手という泳法で下ってくるのが見えていましたが、私にはその泳ぎ方がいかにも下手に見えました。

K子さんが私のいる水辺の10m近くまできたときに、疲れたのでしょう、足が川底につくか試してみたのです。ところが足がつきません。水は岸とは反対の方に回っています。彼女は急に不安になったのか、「先生助けて。」と言いました。すると彼女の近くまで泳いで来ていたあの逞しい男性も「助けて。」と言いました。

年格好は私ぐらいですが、体はずっと大きく筋骨隆々の男性が「助けて。」と言ったことに私はショックを受けました。「二人を助けるなんてどうやったら」と焦った気持ちで、私は後ろを振り返りました。すると川原に元の方は直径20～30cm長さ5～6mほどの大きな孟宗竹が転がっていました。私は傍にいた一年生の男子生徒に「おい、あの竹を持って来よう。」と言って、一人ではとても持てない重さの竹を二人でえっさえっさと水際まで運びました。ところが、二人は自力で水際まで泳ぎ着いていたのでした。本当にシャンピリした経験でした。

後から冷静に考えてみると、二人ともまだ余力は残っていたのですが、K子さんがふいに怖くなり、男性もK子さんの声で怖くなったと思われます。こんなとき、私のとる態度としては

○「大丈夫と声をかける。」

○「孟宗竹をもってくるから、それまで頑張って。」

と声をかけてから竹をもって来る。の二つがよかったかなと今では思います。

翌年の夏休みにも同演劇部の柳の瀬合宿にゆきましたが、そのときはビニール製の浮き輪に空気を強く詰めロープを結びつけて、川原の水辺近くに備えておきました。幸い前年のようなことはありませんでした。

その翌年、水泳が得意な体育教師の水難救助の実演講習をみました。それは溺れかけている人には前から近づかない。①後ろから近づいて髪をつかんで横泳ぎで岸辺に引き寄せる。②しがみつかれたら、いったん、いっしょに深く沈む。すると溺れかけている人は苦しいので、手を放し浮かび上がろうとする。その後は①の要領で助ける。というものでした。

溺れかけている人を救助するのは容易でないと感じました。

第184回高退協読書会案内

10月14日（水）14時～　ムトー荘2F（206号室）

テキスト　宇野　重規著　講談社現代新書　『民主主義とは何か』

参加費　六百円（会場使用料）

参加希望者は直接お越しください。

お問い合わせは次の方々のいずれかにご連絡ください。

樋口勇雄　高橋泰宏　小島真子　大川法由記　井上圭介　三谷隆彦

8月例会の報告

安田節子　『食べ物が劣化する日本』

8月の例会は青木、大川、小島、高橋、谷内、三谷美、渡辺、山本、樋口の9名が集いました。

・学生時代に『沈黙の春』を読みました。あれから50年

・遺伝子組み換え作物、ゲノム編集食品、ネオニコ系農薬、食品添加物など、何を食べたらいいの？と日本人の食生活の危険性を実感します。それをもたらした食品行政の規制緩和、食料安全保障を軽視した貿易交渉など、異常なまでの対米従属の実態が明らかにされています。

・『種子』を守る県条例制定の動き、有機給食を始めた自治体、地産地消の市民運動などを視野において「知らされる」権利を行使し広げる事、そしてやはり政治が・・・　等々たくさんの意見・感想が出ました。

（樋口勇雄）